

〔翻刻〕冷泉家本『明月記』頭書

——建仁元年四月十月十一月同二年正月記について——

井藤 川 功 和

本調査の目的

藤原定家自筆の『明月記』を影印本として刊行した冷泉家時雨亭叢書『明月記』（朝日新聞社 平55平15、全五巻刊行済）を通覧すると、記事本文の上欄に頭書が多く記されていることに気付く。それらの頭書は、「く事」として記事本文の内容を要約したものと、記事を補記したものとの二つに大別される。この内、前者については、定家が長年に渡って記し続けた膨大な「記事の索引の機能を果たして」いる¹⁾。それらの頭書を調査することの意義については、既に尾上陽介氏が「どのような記事に首書が付けられているのかを全体を通して調べることにより、定家が『明月記』を書いた主要な目的やその時期的変化などを知ることができよう」と的確に指摘されている²⁾。これらの頭書は、従来活字本の底本として用いられてきた多くの写本類には見られないものであつて、尾上氏の提示された課題を考へるには、まずは時雨亭叢書の影印本を許に頭書を翻刻する作

業から始めなければなるまい。そこで、『明月記』と記主定家との相關関係を考察する前段階として、頭書の翻刻作業を試みる。本稿では、時雨亭叢書第一巻の内、建仁元年四月十月十一月同二年正月記を調査対象とする。なお、翻刻の一覽にあつて、「記事内容の要約」欄を設け、定家がどういった記事内容について、頭書が必要と判断したのかを知る目安とした。今後同様の作業を継続し、定家が『明月記』をどのように利用しようとしたのか、その全体像を明らかにしたい。

頭書翻刻一覽表

〔凡例〕

- 一、上欄に記入された頭書の内、記事内容を要約しているものを調査対象とした。
- 二、字体は現行の活字体に改めた。
- 三、翻字本文に付した記号は以下の通り。

□ 虫損等の破損を示す。活字本等によって本文の推定が可能な場合は、推定本文を右傍（ ）内に示した。

■ 墨消しを示す。影印によって墨消しを施された本文の推定が可能な場合は、推定本文を右傍（ ）内に示した。

四、表中「紙数」の項は、冷泉家時雨亭叢書に拠る。

五、表中「異同」の項は、国書刊行会本における所載の有無を示す。

六、頭書に記事本文の内容が要約されていない事項に関しては、「記

事内容の要約」欄に、その要約を記事本文の記述順に示した。その際、「頭書が記事本文のどこに位置するかを示す為」、「記事内容の要約」欄に網掛けを施した頭書を加えた。記事の内容要約の立項にあたっては、稲村榮一氏『訓注明月記』(松江今井書店 平14)にならった。但し、稲村氏が立項していない項目を私に立項した場合には、その項目を()で括って区別した。

七、「記事内容の要約」欄中、人名等に適宜注記を加え、()内に示した。

尋 頭書		紙 欄		記事内容の要約	
《建仁元年四月》					
24	自院賜題事	2	無	鳥羽殿の舟遊び↓昨日行幸不	
25				参のこと↓自院賜題事 <small>(鳥羽殿)</small> 為家、瘧病を病む等↓公経を鳥 <small>(鳥羽殿)</small> 羽に訪う	
26	参鳥羽殿束帯 始和哥事		無		
《建仁元年十月》					
27	女院御出家間事	3	無		
30					
《建仁元年十一月》					
13					兼実子息と終日雑談

25	女院御仏事		無		
24	入道左府経営事		無		
23	左大臣殿御仏事		無		
22	親国弟鬨諍事	9	無	八条院御月忌事↓親国弟鬨諍事	
22	除日間書事	8	無	↓下名	
《建仁二年正月》					
23	鳥羽殿講筵	7	無	鳥羽殿講筵↓夜前行幸の供奉人	
22	御口事	6	無	八条院、鳥羽殿御幸	
	豊明節会		無		
	上人不到向及天聰事		無		
21	春宮大夫童昇降之間殿		無	間事↓豊明節会	
20	聞五節間事	5	無	帰京、三条坊門に行く↓聞五節	
19	参日吉		無		
18					為家病む
17					(定家咳病聊か宜し)
16	忠綱来冷泉地請取事	4	無		(定家咳病)
15					(天氣晴)
14					咳病増し、諸病計会す

29	八幡精進事	無	
	陪膳勤仕之事	無	
28	九条殿出家事	無	九条殿出家事↓九条殿荒廃
	女院渡御新御所事	無	
27	承明門院御行始事	無	↓承明門院御行始事
	尊勝陀羅尼供養事	無	
26	三位中将殿御仏事	無	三位中将殿御仏事↓本所仏事
	承明門院御行始事	無	

〔注〕

(1) 尾上陽介氏『明月記』原本の構成と藤原定家の日記筆録意識

『明月記研究』5号 平12・11)。

(2) 前注(1) 尾上氏論文。

(3) なお、徳大寺家旧蔵本(現東京大学史料編纂所蔵)は、書写年代が新しい転写本だが、自筆本等との校合がなされており、結果的に頭書等の自筆本の様態を多く留めている。尾上氏「史料編纂所蔵徳大寺本『明月記』について」(『明月記研究』1号 平8・11)参照。

(4) 当該頭書については、冷泉家時雨亭叢書『明月記』一当該記解題に指摘がある。

(5) 当日条について、前注(4) 解題に以下の翻字本文がある。卅

日 自夜前雨、沐浴、病氣猶同、事也」

(6) 時雨亭叢書では、当日条以前に数日分の記事がみえるが、虫

損、欠文が甚だしい。なお、前注(4) 解題には、以下の如く

翻字本文がみえる。「十一月□□ 天晴、□□猶同、日来伝聞、

四日水無瀬御幸云々、□□ 天晴、□□塾居」

(7) 時雨亭叢書では、この後7紙に数日分の記事がみえるが、虫損等による欠文が甚だしい。なお、前注(4) 解題では、「いつのものか不明の記事であるが、前後の記事の内容からして建仁元年九月のものであるうか」として、翻字本文を示す。

—— ふじかわ・よしかず、広島大学大学院教務補佐員——